sikiri
暮らしの目印

八代研究室
00812138　山本　賢人

１．はじめに

近年、自動車社会は人々の行動範囲を拡大したものの、同時に商店街の衰退という都市問題も生み出してしまった。自動車は人々の生活にとって必要なモノである。しかし、商店街の衰退は地域コミュニティーの分散、個別化に繋がる。本計画では、分散したコミュニティーを繋ぎ合わせ、町における新たな焦点を「暮らしの目印」とし、それを生成する装置として〈sikiri〉を提案する（図１参照）。

２．計画地

計画地は、埼玉県深谷市の JR 深谷駅から商店街に通ずるエリアである（図２参照）。深谷市は、埼玉県北部に位置し、渋沢栄一生誕の地として歴史的なレンガ造りの蔵等が存在する街ではあるが、かつての歩行空間だった旧中山道は、現在まさに車道となり、「歩」が見失われている。

３．Concept

Concept は「Focus」。
衰退した町は、「暮らしの目印」を見失っている。暮らしの目印とは、歩道にポツリと置かれた真っ赤なポストのような存在だ。真っ赤なポストは、本来の機能とは別に行動の目印にもなっている。暮らしの中でも、目印は大小様々に存在し、人々の生活を支えていた。しかし今、町は車道によって大胆に切り分けられ、人と車の動線が混乱している。この混乱は、人の町に対する認知を薄れさせ、同時に歩行空間の接点で生まれるコミュニティーを分散、縮小させている。skiri は、そんな暮らしの目印的存在を一度凝縮させ、あるエリア内で発散させたものである。目印の分散を小規模で行い、人が目印を辿る行動を誘発させる。そして、そこに町の新たな交差点を導き出す。sikiri には、歩行空間で生まれる様々な行動要素が、機能として落とし込まれている。

４．sikiri

sikiri の構成要素には以下の５つがある（図４・５参照）。歩行空間を演出する sikiri の配置には規則性はない。配置は道に迷っている時の混乱状態をカタチにして表出する。

１．Margin　「ゆとり」
現代の歩行空間は車道の余剰空間的な雰囲気がある。私は歩道に空間の広がりや気持ちのゆとりを提供したいと考える。

２．Promise　「約束」
人は待ち合わせという「約束」をする。駅で待ち合わせをしている人のように、何かに寄り添い、通過だけでない、待つ空間としても人を呼び込む。

３．Link　「つながり」
空間はそこで完結せず次への手掛かりが存在する事で連続性が生まれる。

４．Point　「視点」
視点を凝縮する事によって空間にひろがりだけでなく、凝縮する要素を取り入れる。

5．Line　「視線」
人の視線の先には何か目標物がある。視線を広げたり、絞ったりする事で、様々な行動を誘発させる。

５．おわりに

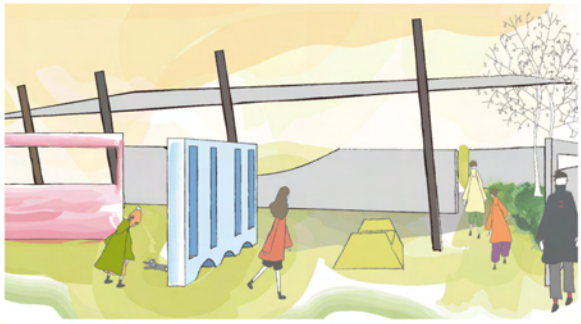
本計画は、私が、３・１１東日本大震災から地域コミュニティーの重要性を再認識した事から始めたものである。人は決して一人では生きていけない。お互いに支え合わなければならないのである。現代の日本は行動のマニュアル化や個別化が進み、地域に対しての認知が低下している。本計画によって、歩行空間におけるコミュニケーションが誘発され、地域コミュニティーの活性化に繋がればと考える。

図 1　sikiri イメージ

図 2　計画地

A-A' Section

B-B' Section



C-C' Section

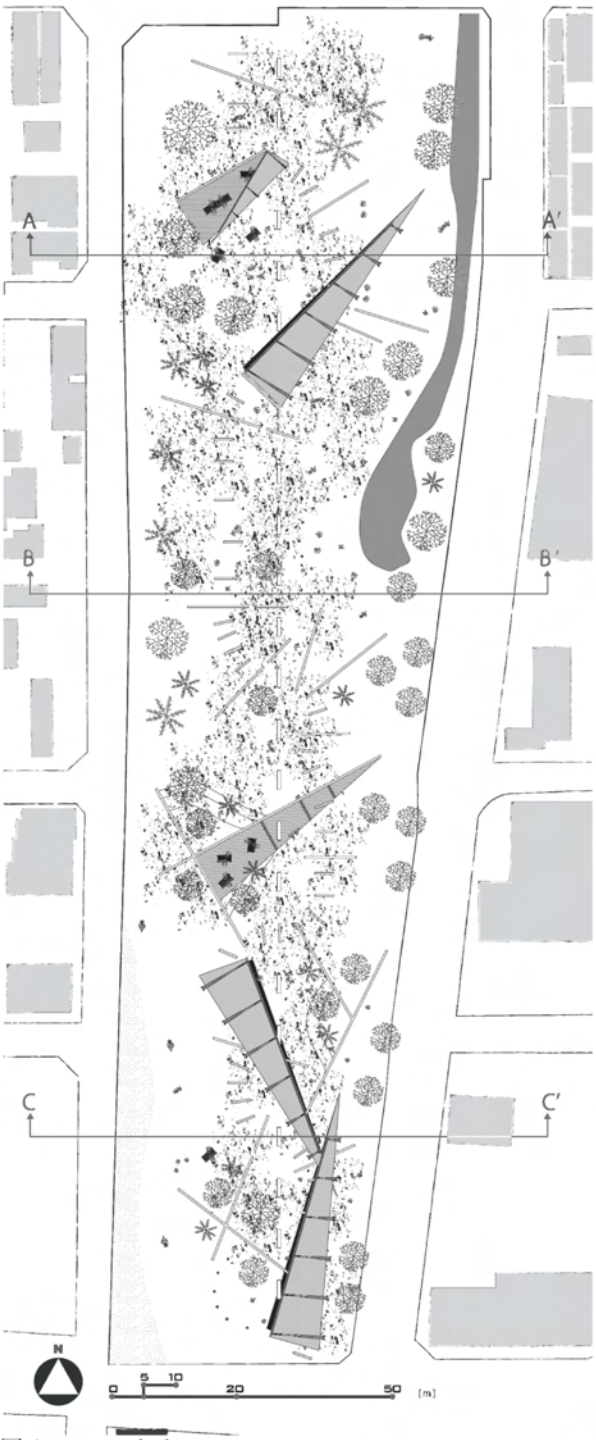


図 4　ground plan

図 5　sikiri 要素イメージ